

RyuMIC PROGRAM 2017

RyuMIC研修医の声

プログラム「ていだ」

いなむら やすひこ

2年目 稲村 靖彦
No.1



Ryu MICプログラムの利点として、大学病院の研修は時間的に余裕があるため、勉強時間が確保できること、ローテートできる診療科や関連病院の選択肢が豊富であること、研修医室がきれいで快適という3点でしょうか。

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1年目	救急		第三内科			第二内科			脳外	精神	小児	
2年目	第一内科	第三内科		精神	第二内科			地域医療	麻酔	精神		

患者さんの多くは、未熟なかけだしの医師たちを大切に、成長を温かく見守って下さります。研修同期もみな親しくしてくれるおかげで日々のびのびと仕事をする事ができており、同期のみなには本当に感謝しています。

大学病院で経験する症例は、やはり複雑なものが多いです。経験を3つご紹介しようと思いません。

一つは、長年にわたって当院に通院されている患者さんの担当になることです。患者さんは当院のことをよくご存じで、主科や主治医と深い信頼関係を築いてこられています。複数回の入院歴があり、学生や研修医が担当になることも何度か経験されています。

二つ目は、これまで大きな病気をしたことがなかったのに、ある時ふとしたきっかけで近くのクリニックを受診したら、大きな病院で検査を受けるよう勧められ、ほどなく大学病院に入院することになった、という患者さんの担当になることです。可能性のある病気について十分な理解も得られておらず不安でいっぱい患者さんを前に、私たちもまた、不安や戸惑いでいっぱいです。初診時のカルテに挙げられている鑑別診断で十分だろうか。他に考えられるものはないか...。学生時代は退屈だった多くの医師が参加するカンファレンスは、今や重要な意味を持つものとなります。患者さんは病気を抱える人間としてのアイデンティティ形成の初期段階にあり、その大事な時期に深く関わっていく私たちは、相当な覚悟を抱いて診療に関わっていかねばなりません。この覚悟は、未熟な私たちを鍛え、成長させます。

三つ目は、難治の疾患を抱え、予後の極めて短い患者さんの診療に関わることです。死を前にして、人生の帳尻合わせがときに静かに、ときに激しく行われているベッドサイドに、毎日足を運ぶのです。死と向き合う臨床の場を経験し、臨床医としての生きる道を学びます。

受容され、鍛えられ、臨床医としての人間性が培われていく。そんな医者人生のスタートを、当院で始めてみませんか？